椎田村而休、距中津五里、炎日赫々、步行頗窘、自椎田至小倉八里餘、余有所期、命車而馳、比正午至行橋驛、則馬車已駕而待、同乘二名直發、自是至小倉、行程六里、驅馬數時而達、道布砂石、以故凸凹、每馬駛、上下左右動搖、使人催嘔氣、比達已過四時、直赴停車場、待列車發、瀛笛一聲、瞬間數里、薄暮經赤間、至博多、已過八時、投停車場外一亭、

十三日陰、早起傳餐、赴停車場、五時半投瀛車、途中雨少降、轉輪猝々、經久留米大牟田高瀨諸驛、至池田、午前十時也、自博多至此、道程三十餘里、費時五時而不足、其速眞可驚也、

叙景記勝、目命筆應、間考古蹟徵史、或賦詩有韻致、有精采、余嘗遊其境、今讀此篇、山容水態、髣髴在目、轉覺用筆之妙、

明治壬辰十一月　　龍巷遯史暴批

故の平山校長太郎ぬーの三年の御祭にさゝぐる詞

助教授　園　哲　雄

あやめふき、早苗とる頃、水鷄の叩くなど、心細からぬかは。といひし人さへありて、昨日今日の空のけしき、あへなく、たゞならず見えけり。まして、故の校長平山の大人の三年の御祭よなんあへる心細さ、ふりしきる雨の水くきよは、得寫し出すべうもあらず。されど、君が情の淺からざりしにえたへで、いにし一年の御祭には、

乾くまもあらで渡りし一とせは君をなみたの夢の浮橋

と云のび音に、なきてしことも、ありき。さても又、際ゆく駒の足早み、三年のあけよふ

今日の悲しさは、夢の中にも、夢を見るこゝちころすれ。昔ある人は、しばしのわかれを惜みて、

一日だに見ねはこひしき君の去ぬは年の四とせをいかてすこさん

といひ去ることもありしかば、いはんや、今日は、

一日だにこひしき君に別れつゝ年の三とせをいかてすきけん。

かきくらす涙に、そぼちつる袖の雫に、文字も、をさゝゝ、しをけなく、消ぬはてゝ、たゞ、かりこもの思ひ亂れたるのみにこそ。ろもゝゝ、明治の御稜威は、いよゝゝ、教育の光に輝き、學校の榮は、ますゝゝ、五百のをゝへ子に滿ちぬんとす。ろの、こゝらの、をしへ子たち、うち集ひて、まめやかに、けふのみまつり、仕へ奉るさまを、安らけく、きこしめして、この、始ある人人の、さながら、終をよくせんことを、天翔りても、見そなはし、守り給へかし、とをしへづかさの、しりへを汚せる園哲雄、謹こ額つきて申す。

贈從軍友人　講師　湯原元一

何時快劍斬君讐。八道風雲隻手收。閔族初無經國志。袁奴元有爲身謀。亂餘天地秋將老。刼外江山月亦愁。莫吊英雄征戰跡。倭城城下水空流。

時事有感　秋月胤繼

堂堂大陸跨兩極。六大洲中最廣域。可憐西夷奪掠餘。僅存日支兩三國。前門有虎後門狼。東洋風雲轉悽愴。沈思到此腸欲斷。須厚隣誼警非常。愛親覺羅何碌碌。乃利少弱拋隣睦。日東天子怒赫焉。三軍直征海與陸。何